

平成 22 年 6 月 21 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008 ～ 2009
 課題番号：20810032
 研究課題名（和文） 南アフリカにおけるアフリカ正教会の活動とその発展
 研究課題名（英文） African Orthodox Church in South Africa

研究代表者
 荒木 圭子（ARAKI KEIKO）
 東海大学・教養学部・講師
 研究者番号：00512633

研究成果の概要（和文）：本研究期間においては、主に資料の収集と精読を行った。収集資料の量が膨大であることと資料が各地に散在していることから、研究期間中にすべての収集作業は完了しなかった。しかし、ウガンダで実際のアフリカ正教会（現在はウガンダ正教会）の場所を突き止め、訪問することができたほか、これまでに相当数の資料を収集できていることは本研究において大きな財産である。これまでの途中経過は、キリスト教関係の研究者が多く参加する史学会大会にて発表した。

研究成果の概要（英文）：During this research period, I mainly devoted my effort to collect and read documentation. Due to the fact that those documents are very old and scattered in various places, I have not finished collecting/reading them yet. However, it is extremely favorable that I own a vast amount of documents. I gave a presentation about this project at the annual conference of the Historical Society of Japan and received a lot of instructive comments.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009 年度	930,000	279,000	1,209,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,250,000	675,000	2,925,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：アフリカ、南アフリカ、アフリカン・ディアスポラ、黒人教会、パン・アフリカニズム

1. 研究開始当初の背景

従来の地域研究は、主に国家や地方という、

土地に根ざした区分に基づいて行われてきた。しかし、近年のグローバル化を待つまでもなく、多くの民族・人種集団は、国境や地

域の枠組みを越えて存在し、ひとつの大きな共同体を築いてきた。

ポール・ギルロイが『ブラック・アトランティック』のなかで提示したのは、このような脱国家的な「地域」の存在である。大西洋世界に広がる黒人独自の世界の存在を解き明かすギルロイの研究は、あらゆる学問領域に対してインパクトを与え、思考の枠組みとしては広く受け入れられてきた。しかしこの「ブラック・アトランティック」を具体的に実証する研究は、未だ十分とは言えない。

とくに、アフリカ内部の動態をディアスポラとの関係の中で検証しているものを見つけるのは困難である。実はギルロイの『ブラック・アトランティック』にしても、「アフリカ」について語られているにも関わらず実体的なアフリカが不在であるという決定的な欠陥をもっている。

本研究は、この「地域」で起こった実体的運動の「連鎖」を検証することで、アフリカ人とアフリカン・ディアスポラの間が存在してきた共同体的世界を実証し、ギルロイの提示した「ブラック・アトランティック」の世界を補うものである。

2. 研究の目的

本研究の全体的な構想と目的は、アフリカとアフリカン・ディアスポラ（アフリカ外に居住するアフリカ系人）世界を、ひとつの「地域」としてとらえ、そこにおける人、モノ、情報、思想などの有機的なつながりを歴史的に検証することである。

具体的には20世紀初頭に南アフリカで展開したアメリカ黒人によるアフリカ正教会（African Orthodox Church）の脱国家的な活動に焦点を当てる。本研究では、アメリカにおいて同教会がどのような経緯で設立され、南アフリカに活動を拡大し、その後、アフリカ大陸内でどのような発展を遂げていったのかを検証する。

とくに本研究で明らかにしようとしているのは、アフリカ人とアフリカン・ディアスポラの関係が、2点を結ぶ単線的なものではないということである。最初に南アフリカに入ったアフリカン・ディアスポラの運動は、アフリカ内部で発展を遂げ、後年さらにベクトルの向きを変えて、アフリカン・ディアスポラ自身の運動に影響を及ぼすようになった。ここには、時空を超えた複合的な関係性が存在する。本研究は、この複

合的關係を歴史的に実証するものである。

研究期間内に明らかにすることは、（1）アメリカ合衆国におけるアフリカ正教会の設立の経緯と協会の思想的背景、（2）アフリカ正教会の南アフリカへの拡大と定着、（3）ケニアやウガンダをはじめとするアフリカの他地域への拡大の背景、である。

3. 研究の方法

本研究は歴史研究である。扱う時期は20世紀前半から60年代にかけてであるが、中心となるのは第一次世界大戦から第二次世界大戦までの時期となる。

研究方法としては、基本的に文献研究、資料収集、資料精読の順序で進めていく。関連する一次資料を収集し、それを精読する作業が中心となる。

収集・精読する主な資料は、以下の通りである。

・ Robert A. Hill, ed., *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers* (University of California Press, 1983-)

・ *Negro World* (Microfilm)

・ Universal Negro Improvement Association Records, 1921-1986 (Microfilm)

・ Universal Negro Improvement Association, Central Division (Microfilm)

・ African Orthodox Church Records
エモリー大学、ピッツ神学図書館（アメリカ合衆国）にて収集

・ *The African Orthodox Churchman* (microform)
エモリー大学、ピッツ神学図書館（アメリカ合衆国）にて収集

・ Records of the South African Institute of Race Relations Papers, I, II & III
ウィットウォーターズランド大学図書館（南アフリカ）にて収集

その他、各国政府／植民地政府資料

・ National Archives of South Africa (南アフリカ)

- ・ Public Record Office (イギリス)
- ・ Archives Nationales (フランス)
- ・ League of Nations Archives (スイス)

4. 研究成果

(1) 資料収集に関する成果

2年間という歴史研究としては短い本研究期間において、最も成果のあげられた部分は、資料収集であろう。

アメリカ合衆国、南アフリカ、イギリス、フランス、スイスにて資料収集、ウガンダとルワンダにて予備調査を行った。

アメリカ合衆国のエモリー大学(科学研究費配算前であったため、別の予算で出張した)では、今回の調査のなかでもっとも重要な資料と考えられる **African Orthodox Church Records** を閲覧し、デジタルカメラで約 3000 枚もの資料を撮影することができた。全てのページを撮影できたわけではないが、全体の8割ほどのページは撮影できた。

アメリカ合衆国と南アフリカでは、以前から何度か資料収集を行っており、すでに多くの関係資料を保有している。今回収集した資料を含め、相当量の資料が手元にそろっている。

今回の研究期間における資料調査で特筆すべきは、ウガンダでの予備調査である。日本では知ることのできなかつた政府資料の所在のほか、アフリカ正教会(現在はウガンダ正教会)そのものを訪れることができ、司教にインタビューすることができた。司教からは、本格的な資料収集の際に教会に滞在しながら調査することに対する了承を得るなど、この訪問は今後の研究につながる大きな成果であったと言える。

一方、研究テーマに深く関連するイギリスにおいては、アフリカ植民地に関する資料などのなかに、多くの関連資料が散在していることが分かった。イギリスについては、アメリカ合衆国同様、再度の資料収集が必要である。

(2) 文献研究および資料の精読から得た成果

上記で述べたように、膨大な量の一次資料が手元に集まりつつある。しかし、およそ 100

年近く前の資料であることから保存状態のよくないものも多く、精読に時間がかかっている。

これまでに、アフリカ正教会の設立やその背景についてはある程度明らかにすることができた。とくにキリスト教世界における同教会の位置づけについては、文献研究のほか、史学会年次大会で発表した際にフロアから出された質問・コメントから得るものが多かった。

また、同教会の拡大の様子が、アメリカ合衆国～南アフリカ～東アフリカ(～アメリカ合衆国)と、きれいな弧を描くものではないことも明らかになった。すわなち、ここには運動の「連鎖」だけでなく「断絶」も見られる。これは、「ブラック・アトランティック」の複雑性を示すものであり、以下に記すように、本研究をより発展させ得るものと考えられる。

(3) 研究の位置づけに関する成果

報告者は、ギルロイの『ブラック・アトランティック』への批判から出発し、その不十分な点を補完するものとして本研究を位置づけている。ギルロイの議論の内容は、国境を越えた脱国家的な「地域」がアフリカ人およびアフリカン・ディアスポラの中に存在し、そのなかでさまざまな有機的相互関係性が見られるというものである。

これに対する報告者の批判は、研究の目的でも述べたように、ギルロイの議論のなかにアフリカが「当事者」あるいは「主体」として登場しない、という点にある。

本研究は、「ブラック・アトランティック」におけるアフリカ側の主体的かかわりについて明らかにするものであるが、この2年間の研究によって、さらにこの点を発展させられる見通しが出てきた。

ギルロイは『ブラック・アトランティック』のなかで、これまで普遍的とされてきたヨーロッパ中心の単線的な歴史観を相対化し、「ブラック・アトランティック」においては、それとは異なる散発的・錯綜的な歴史の展開があることを示している。

とはいうものの、実際にギルロイの『ブラック・アトランティック』を読んでもみると、奴隷貿易を起点として描かれていることがわかる。このように奴隷貿易からアフリカ人とアフリカン・ディアスポラの歴史を描き始めるということは、ヨーロッパの単線的な歴

史をそのまま受け入れ、それを基準にしているということを意味する。

本研究において、ヨーロッパとの接触以前から存在してきた土着宗教の影響を分析に取り入れられれば、上記のギルロイの議論に対するより説得力のある批判となると考えられる。

また、(2) で述べたように、アフリカ正教会をめぐる「連鎖」と「断絶」の分析からも、単線的でないブラック・アトランティック世界を描くことができ、上記と同様に有効なギルロイ批判となると考えられる。

(4) 今後の展望

当初、資料の所在が不明であったため、東アフリカ地域は研究対象には組み入れていなかったが、ウガンダやケニアを含む英語圏アフリカ地域に対象地域を広げることで、(3) に記載したような研究の枠組みにおける深みや広がりも出てくると考える。

まずは、所在の分かっている資料を収集することと、集めた資料の精読を行うことが本研究の継続において最重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

荒木圭子、第一次世界大戦後におけるアフリカ正教会の活動—その設立と南アフリカへ波及、第 107 回史学会大会、2009 年 11 月 8 日、東京大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 圭子 (ARAKI KEIKO)
東海大学・教養学部・講師
研究者番号：00512633